

---

# 生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

dandy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

### 【Nコード】

N5767J

### 【作者名】

dandy

### 【あらすじ】

別連載「ハヤテのごとく!!!! Super-combats  
tory」のアナザーストーリーです。

## キリカ・オブ・メナス（前書き）

アナザーストーリー第4弾は初の複数人数です。まあ三人揃って1つみたいな感じですよ。： 泉は一人でやったけど。本当は本編に組み込んで良かったのですが進行上オリキャラ出さなきゃダメかな？と感じたので別連載という形になりました。目標はただ1つ！「完結」その二文字です。

## キリカ・オブ・メナス

『や、やめてよ理沙ちゃんってばっ！』

『いいじゃないか！いいじゃないか！減るもんじゃないし！』

『そういう問題じゃなくてっ！』

ここは白皇学院内にある動画研究部の部室。今、部員の一人である瀬川泉の恥ずかし動画を撮られた泉と花菱美希、朝風理沙の三人で見ているのだ。

「ちよっ…！まだあつたのこのテープ…！」

「捨てるには惜しいな…」

「いいよお捨てても！」

三人は今まで撮った動画の鑑賞会をやっていた。その目的は近々行われるという理事長による部活動の視察の準備をするためだ。

「こんな変な動画ばっかじゃ次こそ廃部になりかねん。理事長が気に入りそうなテープを探すんだ！」

「しかし…理事長お気に入りハヤ太君の動画は殆ど残っていないし…」

泉は大量の自作DVDを漁る。そしてハヤテ関連のDVDを数枚発見した。

「ハヤ太君が剣道やってるやつは？」

「普通すぎる」

理沙が即却下した。

「なら…ヒナちゃんを膝枕してるのは？」

「たいして理事長は気に入らない」

美希が怒り気味で却下。

「えー？じゃあどうするの？今からじゃ間に合わないよ？」

「くそう！時間はたくさんあったというのに我々は何をしていたんだ！！」

「仕方ない。ここは断腸の思いで泉を生贄に…」

「やだよ！あの理事長のことだから動画を携帯配信ダウンロードとかするかもしれないよお！！」

泉が本気で焦っているのと部室のドアが開いた。三人は理事長が来たかと焦るが入ってきたのはまったく違う人だった。

『あ、みなさん。ケーキが焼けましたよ』

「あ、13号君」

「すまん。おやつを頼んだりして」

『いえ。ナギお嬢さまにお三方をよろしくと言われましたので』

臨時に動画研究部を手伝うことになったメカ執事13号。しかし三人娘によって部活動とはまったく関係ないことに利用されていた。

『ご要望どおりフルーツケーキです』

「おいしそ」

「執事としてはハヤ太君よりも上だな」

「口答えしないし、宿題はやってくれるし」

美希の言うように13号は三人の宿題まで一手に引き受けているの

だ。あの方に知られたら怒られることは確かだが四の五の言っている場合ではない。毎回ギリギリの成績の三人はどんな手を使ってでも進級しなければならぬのだ。三人はひとまず部活動を忘れおやつタイムに。

「ねえ？本当にどうするの？」

「それは食べたなら考えるさ。焦っても答えは出ない」

理沙はケーキを頬張りながら言う。

「最悪、ハヤ太君を今すぐ呼び出して理事長の意のままに女装させて満足させるというのは…」

「それ動画関係ないじゃん！ああー！本当に困ったぞ！困ったちゃんだぞ泉！」

「ええっ！？そんなこと言われても…」

『あの…みなさんにかお困りのようですが、一体どうしたんです？』

「…１３号。なあ、このハヤ太君に瓜二つの１３号を女装させて理事長の機嫌を取るといのは…」

「美希ちゃん…さすがにそれはないよ…」

珍しく泉が真っ向から批判。だが美希はまだ食い下がる。

「いいや、いけるんじゃないか？後ろ姿でなおかつ顔にモザイクかければ…」

「それじゃあ誰だかわからないよ？」

「…作戦失敗か」

結局いい案が浮かばない。そんな中再び部室のドアが開いた。今度こそやって来たのは理事長・葛葉キリカとその執事暮里詩音だ。

「諸君、相変わらず無駄に時間を浪費しているようだ。少しは学院のために働いたらどうだ？」

「そうだそうだ！というわけで動画研究部は即刻廃部に……」

「ちょ……ちよつと待ってよお……！」

いきなりの廃部宣告に泉が大慌て。美希と理沙もだ。

「理事長！今、理事長が気に入りそうな動画を探しているのでしばらく時間をください！」

なんとか美希が時間を稼ぐ。キリ力も少しだけだと念をおす。

「それにしてもこの部活は来客があっても菓子も1つも出さないのか？減点」

「ああ！ちよつと理事長！」

「か、菓子ならすぐに！」

と理沙は言ったものの部室には甘党のキリ力を満足させられそうな菓子は無い。

（し、仕方ない……）

「ど、どうぞ理事長……」

苦し紛れに理沙が理事長に出したのは13号が作ったフルーツケーキだ。しかも半分はもう食べてなくなっている。詩音はこれを見て怒る。

「こ、こら！食べかけを出すなんて失礼極まりない！問答無用だ！動画研究部は本日をもって廃」

「まあ待て詩音……朝風。もしこのケーキが私の口に合えば今回の件は多目に見てやろう」

「ほ、本当ですか!？」

「ちょ…葛葉さま…!!」

理沙はわずかな光が射し込み笑顔に。詩音は不満そうな表情だが。

「詩音、スプーン」

「は、はい」

キリカが右手を出すと詩音はどこからかすぐにスプーンを出しキリカに渡す。そしてケーキを一口食べた。緊張の一瞬。理沙は震えながらキリカの返事を待つ。

（だ、大丈夫なはずだ…!あのメカ執事が作ったんだ…!おいしくないはずが…）

理沙がびくびくするのを見てまだハヤテの動画を探していた泉と美希も緊張する。そしてキリカは顔をしかめながら理沙に質問。

「朝風。このケーキは一体どこに売っているんだ？」

「え?あ…いや、そのケーキは売り物ではなく…」

「手作りだと!？」

「は、はい!」

理沙が答えるとキリカは一気に高揚。感情を一気に爆発させた。

「う、うまい!!この世にまだこんなうまいものがあったとは!!」

朝風!!動画研究部は存続決定だ!!」

「ほ、本当ですか!？」

「二言はない!」



キリカの言葉で理沙を含めた三人娘は大いに喜んだ。キリカもそれを見るとイスから立ち上がる。

「よし！視察は終わりだ。詩音！帰るぞ」

「はい！葛葉さま」

視察が終わり三人娘はホッと一安心。だがその時間も長くは続かなかった。帰り際にキリカはもう1つ理沙に聞く。

「朝風。ところであのケーキを作ったのはどのどいつだ？」

「えっと…彼です」

理沙はすぐに13号を指さす。

「そのメカが？」

キリカは念のため聞き直した。

「はい。そうです」

「そうか…おい、貴様」

『なんでしょうか』

「こんなところで埋もれているとは惜しい…。理事長権限により今からこのメカは私の物！！これからは私のためにスイーツを作るのだ！」

「…「ええ！？」」「」

三人娘は驚愕。もちろん異議を申し立てる。

「か、勘弁してください理事長！」

「そうですよ！これは元々…！」

「私の決定に文句があるのか？なら仕方ない。やっぱり動画研究部は廃部に…」

「くっ…！」

三人娘は「廃部」の二文字を出され抵抗できなかった。13号は不本意ながらキリカの所有物となってしまうのだった。

## キリカ・オブ・メナス2

理事長・葛葉キリカにメカ執事13号を奪われた三人娘。動画研究部の廃部は免れたものの心は晴れない。

「どうする…。このままじゃいけないぞ」

「わかってるけど…相手が理事長じゃなあ…」

美希と理沙は悩む。なんとかして13号を取り返さなければと。

「そうだよね…。元々ナギちゃんの物なんだから取り返さないとね！」

そう言つて泉は意気込むが二人はその事にはなんの心配もしていないようだ。

「…なにを言ってるんだ泉？」

「え？だってそうでしょ？美希ちゃん」

「違うーうー！我々が心配しているのはこれだー！」

理沙は泉にプリントの束を見せる。

「…え？理沙ちゃん、これって…」

「ああ！そうさ！2学期中に出さなければならぬ課題だ！13号に途中までやってはもらったがまだ半分以上残っているんだぞ！」

「つまり…13号を取り返さなければ留年の可能性が…」

「うええっ！？それは…とてつもなくピンチなんじゃ…！！」

「だからこそ今、なんとか理事長から13号を取り返す策を考えているのだ！」

この考えに泉も賛同。結局誰一人として自分の力で課題を終わらせようという考えは出てこなかった。

「でも…取り返すってどうするの？理事長、13号君のことかなり気に入っちゃったみたいだよ？」

「…そうだ。だからあえてそこを突く！」

「突くってどうやって？」

「任せる泉」

美希は携帯電話を取り出した。そしてある人物に電話をかけた。

「あ、もしもし。私だ。美希だ。今すぐ来てほしい。大丈夫。悪いようにはしないから。じゃあ」

「…誰にかけたの？」

「来てくれるといいんだが…」

そして美希が電話をかけてから数分。部室のドアが開き美希が呼んだ人物がやって来た。

「…なんなんだ？急に僕を呼び出したりして…」

「お、来たなチビッコ」

「チビッコ言うな！！だいたいなんで僕の携帯電話の番号知ってるんだよ！！」

「気にするな。私は政治家の娘だから」

やって来たのはキリカの執事、詩音だ。

「美希ちゃん。呼んだのって詩音ちゃんなの？」

「ああ。希望の星だ」

そして詩音を交え4人は対策会議へと乗り出すことに。まず始めに発言したのは詩音だ。

「ていうかなんで僕を呼んだんだよ」

「まあそれはいずれわかる。それよりチビッコ執事君。理事長は今、なにをしている？」

「その前にその呼び方はやめろ！！」

「ああ、すまん。詩音君、理事長は今なにをしている？」

美希は改めて質問。

「葛葉さまならあのメカ執事にベツタリだよ。…葛葉さま…」

詩音はどこか寂しそうな表情になる。すると待つてましたとばかりに理沙が発言。

「つまり詩音君は13号が邪魔だというわけだな？」

「そりゃそうさ！あいつさえいなければ…」

「我々も理事長に13号を取られたままでは収まりがつかない。そこでだ！詩音君にも理事長から13号を取り戻す作戦に加わってもらいたいのだ！」

「そ、そのために僕を？」

「悪い提案ではないはずだ。13号は私たちの元に帰ってくれば理事長も君をまた重宝してくれるだろう」

美希がさらに協力を求めた。詩音もしぶしぶその計画に乗ることに。

「なら…僕があロボットを破壊してしまえば…」

「ちよっと待て！！それはダメだ！無傷だ！無傷で理事長から取り

戻すんだ！」

いきなり乱暴な解決策を見い出され理沙が焦る。

「確かに理事長からは取り返すことはできるが壊れていてはなんの意味もない」

「じゃあお前たちはどうするつもりなんだ？」

「それは…」

また振り出しに。すると美希が1つ提案した。

「要はあれだろ？ 私たちが理事長を満足させるような動画がなかったから代わりに13号を取られたわけだから今から理事長を満足させるような動画を撮ってくれば一件落着じゃないか？」

「確かに…」

「悪くはないな」

泉と理沙は共感。1人詩音だけはその作戦に難色を示した。

「そううまくいくものか！ お前たちに葛葉さまを満足させるような動画が撮れるのか？」

「そこは今から考えようか。よし、早速…」

再び美希は携帯電話を出す。

「三千院家に電話してハヤ太君に来てもらおう。彼の女装姿をまとめたPVなら理事長も満足してくれ…あ、もしもし。はい、花菱です。実はハヤ太君を…え？ そうですか…。夜？…わかりました。では」

「ど、どうした美希？ 声のトーンが明らかに低いぞ」

「マリアさんが言うに…ハヤ太君は今、ナギ君とお出かけ中らしい。夜まで帰らないと」

「ええーっ！？じゃあどうするの…!？」

「やっぱり僕が破壊するしか…」

「それはダメだってば…!!」

理事長お氣に入りのハヤテも作戦に組み込めず4人は本当に追い詰められた。

「こうなりや…直談判だ…!」

「直談判？理沙ちゃん、どうするの？」

「メカ執事を返してくれるよう話し合いで決着をつける…!」

「無理だよ…!話し合いで解決できる理事長ならこんなに苦労しないって…!」

「やってみなければ…わからん…!」

理沙の決意は固かった。その目はまるで烈火のごとく！

「今から私が理事長に直談判してくる…。みんな、後は任せた…。動画研究部に幸あれ…!」

「り、理沙…!自らを犠牲にしてまで…!!」

「理沙ちゃん…私、理沙ちゃんの勇姿、忘れないよ…!」

「さらばだ、友よ…!」

理沙は威風堂々、部屋を出た。そんな空気に詩音はあまり馴染めなかったらしい。

「…とかつこつけて出てきたはいいがどうするか」

理沙は理事長室前でうろろろしていた。いざ直談判するとなると話を聞いてもらえるか甚だ疑問だったからだ。一応交渉材料として購買で買ったラスクがある。

「まあどう考えても（ケーキ>ラスク）だろうがないよりは…」

ラスク片手に理沙は部屋の扉を開く。

「あ、朝風理沙、入ります…」

鍵はかかっていないが中には誰もいなかった。理沙は誰もいないのを確認すると堂々と中に入っていく。

「理事長…留守か」

『あ、これはこれは朝風お嬢さま』

「ん？」

理沙がちらつと横を見るとそこには13号がいたのだ。

「おお！13号！…あれ？理事長はどうした？」

『理事長さまはなにやら用事ができたとかで出かけました』

「そうか…！」



（これはチャンスだ！今のうちに…）

「13号！理事長がいない今がチャンスだ！一緒に帰るぞ！」

『それはおそらく無理です』

「ど、どうしてだ！？」

『後ろを…』

「後ろ？」

理沙が振り返るとなんとそこにはキリカがいたのだ。しかも詩音も一緒だ。

「な、理事長！？」

「まったく…詩音を探しに行っていた隙に私の部屋に盗みに入るとは…不屈き千万…！」

「ち、違います理事長！私は理事長と話し合いを…」

なんとか理沙が弁解しようとするが詩音の一言ですべてを打ち砕かれる。

「葛葉さま！ウソです！こいつは初めからこの部屋に盗みに入ったんです…！」

「な…！おいしい…！裏切るとはどういうことだ…！」

「初めから仲間になったつもりはない…！」

理沙の発言と詩音の発言、キリカがどちらを信用するかなど一目瞭然だ。

「詩音。お前、このメカに嫉妬していたようだが…そんな心配する必要はない。私の一番はいつだってお前なのだから…」

「く、葛葉さま…」

「そついうわけだ朝風…！貴様は罰としてこれから私の怒りが収ま

るまで私の手となり足となり働いてもらっぞ！」

「げっ！！なぜ！？」

「犯罪を犯したんだ！当然の処置だ！」

『諦めてください。朝風お嬢さま』

「じゅ、13号！！お前まで裏切るか！！」

まさに四面楚歌。理沙にこの包囲網を逃れる術は残っていなかった。

「さあ詩音、メカ執事！！朝風を正装に着替えさせるのだ！！」

「『はい、葛葉さま！』」

「い、嫌だ！！キヤアアアアアアア！！」

理沙の悲痛な叫びは動画研究部の部室にいた二人にも届いた。

「…今のは理沙ちゃん！？」

「なんだか嫌な予感がある…！さっき理事長が来たばかりというのに…！」

「美希ちゃん！私、ちょっと見てくるよ！理沙ちゃんが私の助けを呼んでる気がするんだ！」

泉は理沙の安否を確かめるべく駆け出した。理沙の犠牲は動画研究部に迫る脅威の始まりに過ぎなかったのだ…。

## IZUMI vs KIRIKA

「理沙ちゃんがこのドアの向こうに…!」

泉は理沙を救うべく理事長室の前に来ていた。その表情は固く冷や汗をかいている。そしておそろおそろドアを開け、中に足を踏み入れた。するとそこには我が目を疑う光景が飛び込んできたのだ。

「よ、ようこそお客さま」

「うわあ!!!り、理沙ちゃん!？」

出迎えたのはミニスカメイド服姿の理沙だった。しかも首輪をつけられている。泉はただただ焦る。

「ちよっ…どうしたの理沙ちゃん!？」

「……………」

「な、なんで黙ったままなのよ!」

「恥ずかしいからに決まってるだろ!!」

理沙は赤面しながら答える。すると急にドアが閉まり奥から詩音がやって来た。

「…また動画研究部の…。一体なんの用だ？」

「ど、どうもこうも理沙ちゃんを助けに…」

「無駄だ!こいつはもう葛葉さまの忠実なメイド!帰ることは不可能だ!」

「すまない…泉。せつかく助けに来てくれたのに…」

「ど、どういうこと!？」

泉は恐々としながら聞く。すべての事情は詩音が話した。

「こいつについている首輪には葛葉さまから逃げようとする電流が流れる仕組みになっている！」

「ええ！？そんなのヒドイよ！」

「葛葉さまの部屋に勝手に忍び込んだんだ。当然の報いだ！」

なんとか理沙を連れ戻したい。泉はその一心で詩音にある提案を持ち出した。

「だったら…私と勝負して私が勝てば理沙ちゃんと13号君を連れて帰れるっていうのはどう！？」

「な、なにを急に！！そんなこと」

「なかなか面白そうだな」

「く、葛葉さま！？」

どこからともなくキリカが現れた。詩音は泉の提案に難色を示していたがキリカの態度を見るや一転した。

「…わかりました。葛葉さま」

「…瀬川よ。だが、お前が負ければ朝風と同じように私のメイドとして働いてもらうぞ？競技もこちらで決める。いいな？」

「くっ…！」

「その条件がのめなければこちらは勝負など…」

「わ、わかりました！やります！」

泉はキリカの意見に従った。

「泉…！大丈夫なのか！？」

「それはちよつと微妙だけど…理沙ちゃんのためなら！」

「泉…」

「よし！競技内容を発表する！」

突如部屋が真つ暗になりドラムの音が鳴り響く。そしてキリカの机にスポットライトが当てられ競技の書かれた紙が照らされた。

「競技内容は『チキチキ・執事同士の決闘対決』だ！」

「「執事同士の決闘対決！？」」

キリカの宣言と共に部屋の中は喝采に包まれた。とりあえず泉と理沙は復唱。すぐにキリカがルール説明を始めた。

「瀬川。貴様には兄で執事でもある虎鉄がいるだろう？そこでだ。

虎鉄と詩音とが戦い虎鉄が勝てばお前の勝利としてやろう！」

「つまり…私たちの運命を虎鉄君に託すってこと！？」

「簡単に言えばそうなるな。どうする？主と執事は一心同体。貴様が本当に虎鉄を信じているならこの勝負受けるだろう？」

キリカは余裕の表情。泉は悩んだ。

（だ、だけど…これは私たちの問題…！虎鉄君を巻き込むわけには…！）

「どうした？この条件がのめなければお前の敗けだぞ？」

「うつつ…！ごめん虎鉄君…！理事長！私、この勝負受けます！」

「そうこなくてはな。詩音、準備しろ」

「ハイ、葛葉さま」

詩音がボタンを押すと突如理事長室にリングが出現。舞台は整った。

「さあ！あとは虎鉄を呼ぶだけだぞ？」  
「は、はい！」

泉は携帯電話を取り出した。そして虎鉄の携帯電話にかける。

「……………」

呼び出し音がひたすら鳴る。いつになっても虎鉄は出ない。

「い、泉…？」  
「……………」

しばらく理事長室は静寂に包まれた。そして5分が経過した時、葛葉が声を出す。

「時間切れ。残念だが貴様は失格だ。よってこの勝負我々の勝ちだ！」  
「「ええーっ！？」」

まさかの不戦敗に泉も理沙も慌てずにはいられない。

「そ、そんな！理事長ーっ！！」  
「恨むなら自分の執事を恨むんだな。では…約束どおり…詩音！13号！」  
「『はい、葛葉さま！』」  
「にゃあああああー！！」  
「泉いー！！」

負けた泉は理沙と同じくミニスカメイド服姿に。これでキリカのペツト同然に。

「ふえゝん！人権侵害だよゝ！」

「さて…このまま置いておくだけでは芸がない」

キリカが指を鳴らすと突然黒服の男数人が泉と理沙を取り囲んだ。

「な、なんだこいつらは！？」

「ふっふっふ！こいつらは私の自慢の精鋭部隊！さぁお前たち！やつてしまえ！」

キリカの合図と共に黒服の男たちは全員ポケットの中に手を入れた。

「まさか…撃つんじゃ…」

「嫌だよぉ！！」

そして次の瞬間、たくさんの音と光が二人を襲った。

パシャ！カシャカシャ！

「…へ？」

「これって…」

男たちがポケットから出したのはデジカメだ。そして一心不乱に二人を撮影しはじめる。

「見たか！こいつらは私の専属カメラマン軍団！私の妖艶ですばらしい姿をいつでも撮れるようにいつでもスタンバイしている！」

「…いや、一体なんのために…」



「そこで今回は貴様らのメイド服姿をカメラに収め現像し学院内にばらまくという恥辱を与えてやろうと思う!!」

「な、なんですと!?!」

「あんた本当に理事長かよ!!」

あまりの仕打ちに泉も理沙も黙ってはいない。

「こら!葛葉さまに対してなんて口の聞き方だ!お仕置きだ!」

「「キヤアアアア!」!」

詩音がボタンを押すと二人に電流が走る。

「いいぞ!!その弱々しい感じがたまらなく萌える!!」

「あつ!!痛つ!!」

「くそう!!鉄のせいだ!!鉄の!!」

虎鉄を呪いながら悶える理沙。結局泉も捕まってしまう救出作戦は失敗に終わってしまった。そして泉が理沙を助けに向かつてから15分。唯一部屋に残っていた美希も二人が帰ってこないことを怪しく思い始めた。

「…これはマズイな。泉も理沙も…どうしたんだ?」

美希は何パターンか考えた。どれもすべて理事長に二人が捕まったビジョンだ。

「…どうしよう。私だけであの理事長に勝つなんて不可能!!なら…対理事長最強の彼女にすべてを託すしか他ない!!」

美希はイスから立ち上がり部屋を出た。そして学院内で一際存在感

を示す高い高い時計塔へ足を運んだ。助けを求める人物に会いたい美希だったがエレベーターのボタンを押そうかという瞬間、迷いが生じた。

（だけど…今、生徒会室に行くのは…）

今というのは放課後だ。基本生徒会メンバーである美希は放課後に生徒会室にいないけれどもいつものようにサボったため行くとなにかと都合が悪いと感じたのだ。しかし四の五の言っではいけない美希はエレベーターに乗り込んだ。すぐに最上階に到着！

…かと思いきや。

ガクンッ！

「う、うわぁ！？な、なんなんだ急に！？」

なんといきなりエレベーターが止まってしまったのだ。ここのエレベーターは古いのでよくあることらしいが。

「…最悪だ。なんでまた私の時に…！どうせならヒナギクの時に止まってくれば良かったのにな…」

ぐちぐち言いながら助けを待つことに。

5分…

10分…

助けは一向に来る気配がない。だんだん美希も不安になってきた。

「なんで…なんでこないんだ…！ちよっ…みんな気付いてないのか…！そ、そうだ！」

ようやく美希は非常用の呼び出しベルに気付く。しかしあまりに古いためなのかなにか書かれていた。

『このエレベーターが止まった時は自力で直すか誰かが気付くのを待ってください』

「な、なんだこのエレベーター！？明らかに違法だろ…！いいのかこれ！？大丈夫なのかこれ！？学院改革の前にエレベーター直すのが先だろ…！だ、誰か…っ…！！」

普段には見れないほど美希はあたふた。完全に動揺している。助けを呼びに行くはずが自分が助けてもらわなければならない立場になつてしまつたのだ。

そして美希が1人孤独の中で恐怖と戦っている頃、生徒会メンバーはと言うと…。

「ですから、そこは三角形ABFがADEと同じ大きさなので辺ABの長さはDEと等しい。よって長さは8cmです」

「そういうことか…。さすがハル子ね」

「だてに生徒会の書記ではないですからね」

生徒会長であるヒナギクと書記の千桜、そして副会長の愛歌は学院内の図書館で試験に向けての勉強中だ。ちなみに美希はいつも生徒会の仕事に行かないので知らないのだがこの日は特別に生徒会は休みになったのだ。よって美希がエレベーターに閉じ込められていることなど誰も知らない。

「しかし会長が私たちを試験勉強に誘うなんて珍しいですね」

「なんでも1人でできちゃいそうなものね」

「そんなことないわよ。みんなでやれば見えてくるものもあるし教え合えば効率もいいじゃない」

「まあ会長はいつも例の三人を教えますからね…」

「将来は家庭教師かしらね」

「ならないわよ。私だって勉強するならもっと教えて良かったと思えるような人とやりたいわよ。いつも赤点ギリギリで留年しそうな美希たちに毎回教えてると胃が痛くなりそうだわ」

ヒナギクはそう言ってペンを置く。疲れもあつてか眠そうだ。

「とりあえず…そろそろ図書館の閉館時間ですからお開きにしますか？」

「そうですね千桜さん。でも本当は千桜さんが一番帰りたいんじゃない」

…」

「そんなことはありませんよ。じゃあ…行きましょっか」

「そうね」

「ええ」

三人は荷物をまとめて図書館を後にした。果たして美希の運命やいかに！？

## 生徒会の逆襲

美希がエレベーターに閉じ込められてから数10分。外部からの連絡はなにもなくただただ時間が過ぎていく。携帯電話もなにか別の電波に邪魔されて通じない。

(…一体どうすれば…！)

そんな時、美希の脳裏にある言葉が過る。

『私があなたを守るから』

(…そうだ。いつだって私を助けてくれた…！頼む…！私を助けてくれ…！)

手を合わせ祈ること数秒。“ガクン”という鈍い音と共にエレベーターは急に下に下がり始めた。

(う、動いた…！！)

そして下に到着しドアが開く。そこに立っていたのは生徒会長であるヒナギクだ。

「ごめんなさい。ここのエレベーターすぐ止まっちゃうみたい……  
って…美希？もしかして…」

「ヒ、ヒナ…！…うわああ…！！」

「ちよっ…どうしたの、急に…」

人目もはばからず美希はその場に泣き崩れる。ようやく恐怖から解

放された安堵と願いが通じたからだ。

「と、とりあえず上行く？私、忘れ物しちゃったから…」

「あ、ああ…そうだな…」

ハンカチで涙を拭き美希はヒナギクと共に最上階にある生徒会室へ改めて向かう。

「ちょっと待ってて。私、コーヒー入れるから」

「うん。ありがとう…」

少し経ってコーヒーを入れたヒナギクと美希はソファに隣り合わせで腰かける。一口飲み、美希が声を出した。

「…実はさっきまでエレベーターに閉じ込められていたんだ。ヒナが来なかったら…まだ…私は…」

「そう…だったの」

「本当に…ありがとう」

「…いいのよ。お礼なんて。私たち二人の仲じゃない。今度理事長に言ってエレベーターを改装してもらいましょう。今日はもう遅いし明日にでも…」

「ヒナ…。あと、折り入って頼みがあるんだが…」

「へ？なに？」

美希は理事長に理沙と泉、13号が捕まったことを説明する。

「…だけど私じゃどうにも…。お願いだ！！協力してくれ！！」

「…そういうことね」

ヒナギクは急いでコーヒーカップを片付ける。そして持っていた力

バンをソファ―に置きエレベーターへと向かう。

「美希はここで待ってて。…私はこれから理事長にエレベーターを改善してもらおう言ってくるから」

「ヒナ…！悪い…」

「あと、これからはちゃんと部活らしい活動をしなさいよ。こうならないためにも」

「…努力する」

美希の言葉を聞くとヒナギクは親指を立てエレベーターに乗り込んだ。美希はハラハラした表情のままバルコニーに出ると上から校舎に向かうヒナギクをじっと見つめていた。

「理事長…！」

数分後にはヒナギクはもう既に理事長室の扉を勢いよく開いていた。

「理事長…！いるのはわかってます…！潔く出てきたらどうですか！？」



明かりのない部屋をどんどん進む。少し中に入ったところで部屋の扉が勝手に閉まった。そしてどこからかキリカの声が聞こえてきた。

『やはりお前か。花菱1人では来るまいとは思ってはいたが…』

「どういづつもりか知りませんが理沙や泉たちをどうしたんですか  
…!」

『学校のためにならない生徒など…必要ないからな。貴様も喜ばしいだろう? 問題児がいなくなるというのは…』

「…なにが言いたいんですか」

『私の計画は既に最終段階まで来ている!! 邪魔するとあらば…』

すると天井が開きキリカがトンファーを振りかざしヒナギクの頭上から舞い降りた。

「正宗!!」

間一髪ヒナギクはキリカの攻撃を防いだ。キリカはクルクルと回転し着地した。

「私は決めたのだ。学院に不利益な輩は皆私の専属メイドとして雇  
うと」

「…それで理沙たちを…」

「本日をもって白皇学院は…メイド育成専門学校へと生まれ変わる  
のだ!!」

「はい!?!?…はあ。また余計なことを…」

「余計ではない!! 昨今の萌えブームにあやかりアナライジングした結果だ!! 女子男子を問わず素質があればみんなメイドに仕立て  
てやるぞ!!」

「…バカバカしくて話にならないわ。理事長!! 残念ですけどあなたのもくろみ、ここで私が阻止します!!」

ヒナギクは正宗を構えキリ力と対峙。

「だいたい不利益な生徒なんているわけないのよ」

「ほう…！ずいぶんとおかしなことを…。なんなら動画研究部の友は貴様の役にたっている…？」

「その考えが間違いなのよ理事長。人が人と接するのに見返りを求めるなんて…そんなのは友達とは言わないわ。そこにいてくれるだけで楽しい雰囲気にくれたり笑顔になったり…！そういう存在なのよ。あの三人は。確かに苦勞もするけど…だから嫌いになつたり鬱陶しいなんて思ったことは一度もないのよ…！」

ヒナギクは正宗を振りキリ力は両手のトンファーでそれを防ぐ。ミシミシとトンファーは音をたてる。

「私は…理事長としてやつらに最適な環境を与えているだけだ…！勉強ができないならせめてメイドとして生かして…」

「理事長だったら…本当にあの娘たちを思っているなら信じてあげたらどうなんです…！」

「信じる…！？」

「あの三人が一体どんな大人になるかを…！！可能性を広げてあげるのが大人の役目でしょ！？それを…勝手に未来を決めつけるなんて…」

「くっ…！！」

「いい加減にしなさいっ…！」

「ぐああっ…！」

トンファーは真っ二つに分断されキリ力は正宗の太刀をともに食らい倒れた。そして理事長の机の後ろから詩音がおそるおそる姿を現しキリ力に近づく。

「そ、そんな…葛葉さまが…」

「大丈夫よ。ちょっと気絶してるだけ。…まったく。思い付くのは勝手だけどいつも止める私の身にもなってほしいわ。それより…理沙たちは？」

「あ、あいつらなら隣の部屋だ…！」

「ありがとう。隣ね」

「…それから、これ。首輪の鍵だ」

「…首輪？」

「くそう…！覚えてろ…！」

煙と共に詩音とキリ力はどこかに消えてしまった。そしてヒナギクは詩音の言ったとおり隣の部屋に入る。

「「お、おかえりなさいませご主人様」」

「…へっ？泉に…理沙？」

「え！？ヒナちゃん！？」

「なんでヒナが…！」

ヒナギクはメイド服姿の二人に出迎えられた。二人とも真っ赤になり、顔を背けた。

「ち、違っんだヒナ…！これはやりたくてやったわけじゃなくて…  
…！」

「うんうん…！理事長先生に無理やり…」

「わかってるわよ。でも…なんだかわいいわよ」

「…そ、そうか？ならこのまま…ってそんなわけあるか…！…助けに来てくれたのか？」

「そうよ。…首輪までされて…」

「うっ…！怖かった…」

ようやく電流の恐怖から抜け出せた泉は全身の力が抜けたのかその場にへなへなと座り込む。

「さ、もう遅いから帰るわよ」

「もう夜だな…」

「ねえねえ だったらみんなでごはん食べない？ヒナちゃんにも助けてもらったしおごるよ」

「そうだな！どうせ宿直室にも雪路がいるだろうし美希も呼んで5人でパーティーだな！」

「なんのパーティーなの…。またなにかに託つけて騒ぐんだから…」

「いいじゃんか！さあさあ行くぞヒナ！！」

「みんなで朝まで騒いじゃおう」

「そんな…おお、押さないでよ！！」

こうしてヒナギクの活躍により学院の平和と動画研究部は守られた。しかし安心はできない。三人娘の次なる敵は…そのヒナギクであるからだ。

## 新たな危機（前書き）

これから第2章みたいなカンジです。たいして変わらないけど。散々オリキヤラ出すとかいつてますが、いつになるのやら…。では、どーぞ。

## 新たなる危機

キリカの野望を阻止した三人娘（正しくはヒナギクなのだが）は部活の存続も決まり悠々自適な活動を相変わらず行っていた。土曜日になり三人は部室でぐーたらしていた。

「だが本当は部活をしている場合じゃないんじゃないか？」

「だよーねー。期末試験も近いし、勉強したほうがいい気もするけどね……」

「だがいかんせん雪路は温泉旅行……。私たちは誰を頼ればいいのやら……」

三人は部室のイスに座り談笑していた。

「そう言えば……今日は生徒会の仕事らしいぞ」

「『らしい』って……どうということだ？ 理沙」

「いやー昨日な、ヒナに釘を刺されたんだが……」

それは金曜日の放課後のこと。理沙は部活に行く途中にヒナギクに呼ばれたのだ。

「理沙。ちよつと」

「ん？ なんだヒナ」

「明日はちゃんと顔出しなさいよ。生徒会」

「明日なにかあるのか？」

「もう忘れたの？ 明日は生徒会の予算審議の日じゃない。大事な日だから午後1時には大会議室にいてよね。美希と泉にも伝えておいてね」

「ああ。任せろ」

という会話を交わしたのだ。それを聞いた美希が部室の中の時計を見ると1時まであと10分だ。

「気付いて良かったな。間に合わなかったらまたヒナギクに大目玉をくらうとこだった」

「じゃあ行こうか 予算審議って確か部活動の…」

「ああ。我ら動画研究部も予算を獲得するいいチャンスだな！」

「しかも私たちは生徒会。コネはきく」

三人は意気揚々と時計塔にある大会議室へと向かった。だが待ち受けていたのはちょっといらだちの表情を見せるヒナギクだ。

「遅い！なにしてたのよ！！間に合ったらいいと思ってない？1時って言ったら12時50分には来てなきゃ…」

「堅いこと言うなよ。間に合ったらことには変わらない」

「まったく…。とりあえず時間もないし、早く来て」

部屋に入るとすでに愛歌と千桜がテーブルに座り待っていた。ヒナギクは三人娘に予算審議に使う資料を手渡した。

「今日までの部活の内容や大会の成績に応じて褒賞金とか予算を出すから査定内容を確認しておいてね」

「ああ。こうなるとなんだか役人になった気分だな！」

「…野球部にサッカー部にテニス部…。みんな頑張ってるんだね」

パラパラと資料の紙を見る三人。見終わったところで美希があることに気付いた。

「なあヒナギク…。この資料なんだが…ないぞ」

「ないって何が？」

「だから…部活動の欄に私たちの部がないんだけど」

美希はヒナギクに紙を見せる。たしかにそこに美希の部、つまり動画研究部の名が書かれていなかったのだ。それを聞き泉と理沙も驚いた。

「えっ！？なんで！？なんでないの！？」

「なにかの間違いじゃないのか！？」

二人も慌てて確認するが千桜が堂々と答える。

「間違いじゃない。動画研究部は今回の予算審議には加わっていない」

その言葉に三人は耳を疑った。

「どうしてだ！どの部活も例外なく学校のほうから予算をもらえるはずだろ！？」

「ヒナ！！これは一体どういうことだ！！」

美希と理沙はヒナギクに問う。そしてヒナギクの返答はこうだ。

「残念だけど…動画研究部は来年から部ではなく同好会扱いになるの」

「え！？それって…」

「そうよ。学校の決まりでは同好会は予算をもらえないから」

三人は固まった。状況をようやく把握すると予想どおり抗議が始ま



った。

「どうして同好会に格下げなんだ!!」

「そうだ!ちゃんと部室もあるし部員もいる!動画研究部は何年も続く伝統ある部活!」

「ひどいよ!」

ワーワー言う三人にヒナギクが言う。

「仕方ないじゃない。理事長の指示なんだから」

「理事長!?!」

「そうよ。『動画研究部はたいした活動もしていないから部として扱うわけにはいかない』って」

「ヒナはそれでなんて言っただんだ!?!」

「まあ確かに…理事長の言うことももつともだと思うけど…?」

「えーっ!?!そんな〜!!」

「しかし理事長はなぜ今になってそんなことを…」

「やっぱりあのことをまだ根にもってるのでしょうか思えん!!」

「ほえ?あのことって?」

「前回までを読めばわかる」

「…にはは。そっか…」

「とにかくこれは由々しき事態!!なんとかせねば…」

三人がこの危機をどう乗り越えようかと考えているとヒナギクにたしなめられる。

「ちょっと!今は生徒会の仕事を優先してよね。あなたたちの部活のことは後回し」

「わかったよ…」

「仕方ない…」

「萎える…」

なにを言っても文句の類いやため息しか出てこない。それを見てヒナギクもため息が出るのだった。

生徒会の予算審議も終わり大会議室では疲れた表情の生徒会メンバーが残るのみ。

「はい。紅茶でよければ入れたわよ」

ヒナギクが他のメンバーのために紅茶を入れてきた。真っ先に飛び付いたのは泉だ。

「やっと終わった〜！私、こういう重苦しいの苦手…」

「右に同じ」

「以下同文」

理沙と美希も紅茶をもらう。

「あ！そくだ！美希ちゃん！理沙ちゃん！部活のこと…」

「そうだったな！ヒナ！教えてくれ！どうすれば動画研究部は同好会から部に戻れるんだ？」

「え？そーねー…。やっぱりちゃんと部活動らしい活動をするんじゃない…」

「部活動らしい活動って？」

「だからその…学校のためになるような活動とか…」

ヒナギクの返答に三人は頭を抱えた。そして理沙がすぎる思いでヒナギクに土下座。

「頼むヒナ！理事長に掛け合って動画研究部を部に復帰させてくれ！！」

「ちよっ…やめてよ！理沙！そんなことしないで立つてよ…」

「頼む！このとーり！」

理沙はさらに深々と頭を下げる。これだけされて何もしないわけにもいかないヒナギクはある提案をした。

「わ、わかったわよ！理事長に掛け合ってみるって」

「ほ、本当か！？」

「だけど一つ条件があるわ」

「やっぱり…」

美希はちよつとめんどくさそうな表情に。

「あなたたち動画研究部がしっかり活動しているということを証明するためにこの白皇学院に関係ある動画を作ってもらえる？」

「ほえ？」

「ほえ？じゃなくて…。あなたたち、いつもくだら…個人的な動画しか作ってないみたいだからたまには学校の役にたつような映像

をとつてくること。いい？そうすれば理事長も認めてくれるはずよ」  
「あ。それなら簡単だな。よっと」

美希はすぐに持っていたビデオでヒナギクを撮り始めた。ヒナギクは一体なぜ自分を撮り始めたかわからない。

「ちよつと…美希？」

「これこそ白皇学院究極の動画！『生徒会長桂ヒナギク1日密着動画』！おそらく生徒が一番知りたがっていることだろう！できれば入浴時にも撮影を…」

「そんなもの認めませんっ！！！！！」

ヒナギクは正宗片手に美希を威嚇。美希は逃げるように愛歌の後ろに隠れた。

「まあまあヒナ。そう怒らない方が…」

「愛歌さんは口を挟まないで！」

「あらあら…。じゃあ…こういうのはどうかしら？」

「なんですか？愛歌さん」

今度は愛歌が美希に提案。

「実は動画研究会と同じように部から同好会になった部活もまだあるのよ」

「動画研究会って…」

「聞してる？」

「聞いてます！」

「動画研究会と同じように格下げされてしまったのは…幽霊研究会よ！…！」

幽霊研究会。それは古今東西あらゆる幽霊やそういう類いのものを研究する同好会である。

「ほう…そんなものが」

「以前までは部扱いだったのよ。だけど理事長が『幽霊なんぞ得体のしれない物を調べるなど笑止千万！』って言って…」

「格下げと」

「廃部になる予定だったんだけど私が尽力してなんとか…」

愛歌が廃部寸前の部活を救ったことに三人は驚いた。

（意外だ…。愛歌さんなら潰れた部活を見て喜びそうなもの…）  
「ど、どうして幽霊研究会を存続させたんです？」

理沙の質問に愛歌は即答。

「だって…幽霊なんて研究する痛い人たちをこの目で拝めると思うとかわいそいで泣けてくるでしょ？」

「は、はあ…」

いいことなのか悪いことなのか三人にはよくわからなかった。

「冗談よ 生徒会として困っている生徒を放っておけなかっただけ

…」

「そ、そうですね…」

「とりあえずその幽霊研究会を訪ねてみたら？なにかいいヒントがもらえるかもしれないわよ」

愛歌の言う通り三人は早速幽霊研究会の部室へ向かった。いよいよ本格的に動画研究部（会）存続への戦いが始まった。

## 春だけと怪談物（っぽい）

動画研究部を再び部として認めてもらうために三人娘は校舎3階にある幽霊研究会（元・部）の部室に来ていた。

「幽霊研究会というわりには普通の教室となんら変わらなそうだけどな」

理沙が言つと泉と美希が同じタイミングで頷いた。

「でも幽霊研究会なんてあつたんだね。全然知らなかったよ」

「たしかに。この部自体が幽霊的存在だな」

「…どうするの？入る？」

「愛歌さんが行けと言ったんだ。たぶん大丈夫だろう」

美希が扉に手をかけ開いた。幽霊研究会の部室というのに幽霊関連の物は一切なく殺風景極まりない。デスクと茶箱にポットが置いてあるだけだった。

「誰もいないよ？」

「もしかしたらもう廃部に…」

理沙がずかずかと中に入ると急に一人の老人がぬつと出てきた。どうやら扉のすぐ裏にいたようだ。

「おめえ…なに勝手に入ってんだコラア…」

「う、うわ！！ゆ、幽霊！？」

「誰が幽霊だ！失礼だろ…」

「えっと…どなた？」

泉が引き気味に質問。幽霊のような老人は腰を気にしながら答える。

「バカ野郎…っ！俺はここ白皇の教師じゃねエか！」

「ほえ？そーなんですか？」

「こんな先生いたか？」

「「さあ…？」」

三人娘は皆同じ反応を示す。自称白皇教師はついにキレた。

「ふざけんじゃ…ねエ！！！！俺はここの化学教師田中だよバカ野郎！！！」

「田中…先生？」

「知ってるか理沙？」

「知らん」

まったく素性の知らない田中先生。しかし田中先生は思わぬことを口にした。

「俺は…おめえら知ってるぞ…！生徒会の瀬川、花菱、朝風だろ？」

「当たりです。何で私たちのこと知ってるんですか？」

「俺はな瀬川…。ここに勤めてもっ…うん十年になるんだ…。在校生で…知らねえ奴は…いねえんだ」

「へえー。田中先生すごい先生なんだ」

泉が感心したが田中先生の表情は相変わらず冴えない。

「なのによお…俺は生徒全員を知ってるのに…何で俺のことは誰一人覚えてねんだよ！！チクショー！！！」

いきなり大声を出す田中先生。その悲痛な悩みに三人娘は共感する。

「んで…花菱。おめえたち一体ここに何しに来たんだ…？」

「実は動画研究部が廃部の危機で…この幽霊研究会も廃部の危機だと聞いたんです」

「…誰に…聞いたんでい？」

「愛歌さんです」

「霞か…。あいつは…俺の女房の若い頃に…そっくりなんだ」

「はあ…」

にやけながら言う田中先生。まだ話は続く。

「花菱…おめえも俺の娘のちっちゃい頃に似てるぞ。将来は…いい…お嫁になれるぞ！」

「どうも…」

美希はそうとしか言いようがなかった。横目で理沙に助けを求めるも目を逸らされてしまった。ちなみに泉は隅にあった本棚に興味を示し手当たり次第に読んでいた。

「花菱…幽霊は…いると思うか？」

「…いると思います」

「いない」と言うと話がややこしくなると直感的に感じた美希は適当に共感しておいた。

「幽霊研究部は…だいたい今から10年前くらいに俺が作ったんだ…。当時は部員も6〜7人いたんだが…今は…誰もいねえ」

「部員誰もいないんですか？」

「だから…廃部になるんだ。このままじゃ…花菱い！なにかいい案



は…ねえか？」

「…え」

田中先生は美希に食いついて離れない。理沙も泉のほうに逃げた。

「…たしかおめえたちは…動画研究部だったな？」

「そうですが。それがなにか」

「……それだ！！いい案が…浮かんだぞ。今夜…旧校舎に行くぞ」

「旧校舎に？でもあそこは幽霊が出ると噂が…」

「だから…行くんじゃないか！！いいか…幽霊研究部が幽霊を発見したとなれば…生徒会からも一目置かれ廃部は免れる。しかも…その映像を動画研究部が撮ったとなりや…動画研究部も一目置かれる！一石二鳥だ！！」

「なるほど…聞いてたか？泉。理沙」

今までまったく田中先生と絡まなかった二人も聞き耳を立ててこの話だけは聞いていた。暗く重い黒雲からようやく光が射し込んだ。そんな気分だ。

「いけるよ…幽霊さんを見つければヒナちゃんもきつと認めてくれるね」

「それだけじゃ面白くない。いつそヒナが怖がるくらいの衝撃映像を撮ってギャフンと言わせてやろう！！」

「おお！それいいな！！ヒナが怖がる姿をさらに撮れば一石二鳥どころか一石三鳥も四鳥もいけるぞ！」

一気に三人娘のテンションが上がっていく。田中先生も同じだ。

「よし！おめえら…覚悟はいいな！？幽霊に怯えて逃げるんじゃないぞ！」

「ラジャー」

「旧校舎に行くとなれば懐中電灯は要るな」

「暗闇でも使えるカメラも要るし。そう言えば田中先生。幽霊を呼び出すおまじないのものはあるんですか？」

理沙が聞くと田中先生は部屋の奥からぼろぼろの縦笛を持ってきた。

「こいつが…幽霊を呼び出す道具だ」

「リコーダー？」

「瀬川…この縦笛を持ってけ」

「うん…。でもただのリコーダーだよ？」

「よく聞け…。この縦笛はただの縦笛じゃねーぞ。…実はだな…」

いかにもな雰囲気醸し出す田中先生に三人娘は一瞬怯える。

「今から15年前…ある一人の男子生徒が…いたんだ。そいつには好きなクラスメートがいてな…。いっつもそいつのことしか頭になかったんだ」

「告白とかしたのか？」

「いいや…。そいつはウブで女子生徒と目が合っただけで顔を赤くする程だ…。しかしいいよ…卒業の時期に差し掛かった…。野郎は卒業式が終わったら告白するつもりだったらしい…だけど…」

「だけど？」

「その女子生徒は…卒業式には来なかった。親の急な転勤で…学校から荷物を持ち帰る暇もなく海外へ行っちゃったんだ…」

「…それでその男子生徒はどうしたんだ？」

「ここからが肝心だ…。男子生徒は悲しみに暮れた。卒業式が終わって…放課後になっても…教室に残っていた。好きな女子生徒と一緒に学んだ旧校舎のな…。そして誰もいない教室で…女子生徒の縦笛を吹いたんだ…」

「『……………』」

真面目に聞いていた三人娘もなにかのスイッチが切り替わる。

「女子生徒は…吹奏楽部でな。縦笛が…すこぶる上手かった。野郎には…それが一番印象的だったらしい」

「それで？なんでそれが幽霊と関係あるんだ？」

「見られたんだ。好きな女子の縦笛を吹いてるところを。縦笛を吹きゃ…音がする。その音を聞き付けた見廻りの教師に見られたんだ。野郎は…死ぬほど恥ずかしかったのか…縦笛を持ったまま…旧校舎の最上階の教室から飛び降りて…」

「…なんだか悲しいのかよくわからないな」

「…それ以来旧校舎のその教室で可愛い女の子が縦笛を吹くと…告白もできずに無念の死を遂げた男子生徒の怨念が出る…らしいんだ」

話が終わると三人娘は曖昧な表情に。同情の余地もなくはないが反応に困る。

「それでその縦笛を吹いて怨念が出たことは？」

理沙が聞くが田中先生はまたまた鬱に。

「今までで幽霊研究部に女子は…いねえから調べようがない。だからよ、この際だから…瀬川にその役を頼む」

「ええ！？私い！？」

「気立てはいいし可愛いから…きっと幽霊は現れる。あと一つ言うが…幽霊に告白されたら…拒否しちゃ…ダメだぞ。拒否すると幽霊の怒りを買って生気を吸われる…話だ」

「じゃあ…OKするの？」

「OKすると…気を許したと思われて魂を食われて…自分が自分じ

やなくなる…らしい」

「なにそれ！？どっちもダメじゃない！！」

「幽霊が…いることを証明するためだ！瀬川！一肌脱いで…くれねえか？」

「そうだぞ泉！」

「動画研究部の行く末はお前にかかってるんだ！」

「そんなの…ヒドイよー！！」

泉の悲痛な叫びも虚しく、夜中、ついに幽霊召喚の儀式が決行されることとなってしまった。一人の少女の命と引き換えに（予定）。

### 三人娘の帰還（終）

「幽霊なんて…いるわけじゃない」

生徒会の予算審議も終わり校内のカフェテリアで紅茶を一杯飲みヒナギクは言い放つ。テーブルを千桜と愛歌で囲んでいる。もう夕方だ。

「まあいるわけないけど…」

愛歌も言う。だが三人娘に幽霊研究会へ行けと言ったのは紛れもなく当人だ。

「では愛歌さんはなぜあんなことを…？」

そう言う千桜の眼鏡は夕日に反射していた。

「幽霊なんているわけないけど…あの三人のことは放ってはおけない…でしょ？」

愛歌はヒナギクに視線を移す。まあ…と言うような苦い表情をしている。

「でも…いくら友達とは言え温情でなんとかしたら他の部活との公平性を欠くわよ？」

「まあ確かにそうだけど…。私たちが手を貸す分には」

「どういう意味？」

「私が意味もなく三人を幽霊研究会に向かわせたと思って？」

「なに企んでるの…？」

にこりと笑う愛歌にヒナギクは多少なりに恐怖を抱いた。夕日でも見えないが。

「幽霊がいらないなら…作るまでよ」

「作る…？」

「ええ。準備にぬかりはないわ 私の情報では今夜、旧校舎に侵入するらしいのよね」

「旧校舎…？よりによってあそこ…？」

「まあいろいろ噂は絶えないけど平気よ。幽霊なんて…いるわけないんだから」

強調するように愛歌はヒナギクに言う。ヒナギクはこくりと頷く他なかった。

日も暮れ辺りは真っ暗に。三人娘と田中先生は旧校舎の前に来ていた。「進入禁止」という立て札を悠々通り過ぎ入口の前の門の目の前にいる。

「さて…お前たち…覚悟はできてるな？」

「ももももちろん！」

「声が…震えてるぞ？」

「そそそんなことないよ！」

田中先生に指摘され泉の声はますます震える。これから幽霊降臨の生け贄になってしまうかもしれないからだ。

「泉。頑張れ！私たちの為に一肌脱いでくれ！」

美希は巨大な照明を携えている。

「ていうかここまで来て引き下がる程余裕も尺もない！さつさと終わらせるぞ！！ウダウダと苦節3ヶ月…」

「いやいや…3ヶ月って？まだ1週間も…」

「うるさい！実際上の話だ。気にするな」

理沙は泉の背中を押し嫌々旧校舎の中へ。ギイギイと音をたてて扉が開いた。中は相変わらず薄気味悪い。と思えばなんだか人の手が加えられていた。至るところの蛍光灯が新しくなっていて埃一つ見られない。

「な…なにこれ？」

「やけに真新しいな。場所間違えたか？」

「そんなはずはない！！…と思うが」

三人娘は妙に明るい旧校舎の中を進んでいく。そしていよいよ例の幽霊がいるという部屋に差し掛かった。

「…なあ。これは一体どういうことなんだ？」

「一切霊的な気配がない。これじゃただの夜回りじゃないか」

「でも手ぶらじゃ帰れないよ？」

三人娘が拍子抜けしていたその時。不意に電気が消え辺りは漆黒に包まれた。あまりにいきなりすることに三人はあわてふためく。

「げ！なんだこりゃ！？」

「とりあえず部屋から出るぞ！！」

理沙はすぐ引き返そうとしたが扉が閉まっっていて開かない。なにかとてつもない力で押さえられているような感じた。さらに暗くてはつきりと様子がわからない。

「いかん！閉じ込められた！！」

「ええ！？じゃあどうするの！？」

「窓だ！窓が開いている！」

美希の言うように確かに窓は開いている。だが飛び降りて平気な高さではない。

「そうだ！携帯だ！誰かに助けを求めれば…」

「誰に！？」

「ヒナあたりが…！！！？」

美希は言葉を失った。なんと窓の外から人がフラフラ浮遊しながら近づいてきたのだ。暗闇でよく見えないが涙を流している。白装束を着た女だ。

「ぐすつ…！さ、さつさとカメラに納めて立ち去りなさいーい！  
！…！！」

「「「キャアアア！！」「」「」



三人娘はあまりの怖さに発狂した。カメラ役の理沙は何度も何度もシャッターを切る。手振れが激しい。

「いかん！逃げろ！」

美希は一目散に扉を開け部屋を出た。今度は簡単に扉が開いた。泉と理沙も後に続く。

「ニヤアアアアー！」

「逃げろ！魂持ってかれるぞー！」

「美希ちゃん待ってよおーっ！！」

三人娘は息を切らしようやく旧校舎から脱出できた。疲れはて呼吸が乱れていると外で待っていた田中先生がやって来た。

「ど、どうだった？」

「ゼーハー…ゼーハー…これを…！」

理沙はカメラの画像を見せた。そこには確かに窓の外に浮かぶ女性

が写りは悪いが確認できた。

「よかったな…！これで三人の苦労も…報われ…そうだ」

「ゼー…ハー…」

「よ、よかった…！そ、それよか…！」

美希はポケットから携帯電話を出し報告しなければならなかった。相手はヒナギクである。何回かの呼び出し音の後、ようやく出た。

『も、もしもし…？』

「わ、私…美希。ヒナ…！聞いて驚くな…！」

『ぐすつ…！な、何…？』

「聞く前から泣いてどうする…。いたんだよ。幽霊がさ…！証拠もある…！これを見ればヒナも動画研究部の意義を認めて…！」

『…それには及ばないわ』

ヒナギクは嗚咽を漏らしながら言う。美希もだがヒナギクも息が粗い。

『旧校舎まで調べに行った…その心意気に免じて存続を…認めるわ』  
「…ほ、本当か…？」

電話に出ながら美希は泉と理沙を見た。アイコンタクトで泉も理沙もなんとなく察し安堵の表情になった。

『と、とにかくもう遅いから帰きなさいよ！』

「あ、ああ…！じゃあな、ヒナ…」

電話が終わると苦労から解放された衝動で三人娘は抱き合った。その様子を田中先生は遠目で見ていた。

(…骨を折った甲斐が…あつたつてもんでい…)

そしてもう1人安心する人がいた。旧校舎の上にいたヒナギクである。側には愛歌に千桜もいた。

「お疲れさまです。会長」

「もー…！ワイヤーアクションなんかもう金輪際やらないんだから！…」

「まあ会長の活躍であの三人も動画研究部存続になったことですし…」

千桜はヒナギクの腰に繋がれていたワイヤーを外した。ヒナギクの顔には涙の後が伝っていた。

「それにしても愛歌さん。いつの間に屋上にこんな設備を？」

屋上にはワイヤーに加え旧校舎の電気の一切をコントロールできるシステムに監視カメラのビデオまで設置されていたのだ。すべて霞家負担である。

「まさか動画研究部存続に2千万円かかるなんて…会に格下げしないほうがよかったんじゃないのかしら」

愛歌は皮肉っぽくヒナギクを見た。だがヒナギクは足もつかない宙に浮かされた恐怖でそんなことに気付きもしなかった。

### 三人娘の帰還（終）（後書き）

中途半端になるけど終わらないよりかはマシ

と思い速攻終わらせました。思えば…3話で終わらせておけばよかったです。毎回思うのは毎度毎度オリキャラを出しては失敗し出しては失敗し…進歩0。まあこっちはオマケ程度。本編が10ならこっちは1くらいの出来でしょうか。頭の中ではいろいろ凝った設定になるのにいざ書くと雑極まりない。だから開始から3ヶ月もかかるんだあ…な。

今度からはちゃんと考えようと…っていうのを何度繰り返したことが。もう私の言葉は当てになりません。さようなら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5767j/>

---

生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

2010年10月10日14時42分発行